

恵吉や健吾が対策の相談を持ちかけたのは、要するに三野庄平の振る舞い酒がめあてだったとしか考えられない。

正月がすぎて十五日、全村あげての成人式が行われる。若者たちが村を出て町へ就職したりするから、該当の人数には足りなかったが、休日とあつて村に帰って出席する者もいた。

成人式が近づくと、まず中村ソノの店がにぎわい始める。妹娘がこしは成人になるため、その同級生が集まるということもあつたが、娘たにも棒にもかからなくて教師もほとほと手を焼いていたイタズラっ子が娘っ子全部の秋波を集める二枚目になっていたりする。

村長の長々とした施政方針演説があり、来賓のボスが自分の人生論をさも得意そうにくり広げる場でもある。

式の主役であるはずの若者たちは退屈し、粗末な生地で作った衣装を身につけて出席した若者は、ズボンがしわになったことにより、その場で蒸発してしまいたい恥かしさと、同席している

ちはどういう髪型がもつとも自分を美人に見せるかの研究に來はじめたのである。ライバルは相手の髪型と全く異なったものを要求し、仲よし同士なら顔かたちの相違はまるで無視して同じスタイルにしたがる。口々にしゃべる娘たちに囲まれて、ソノはそれらの意見調整に生きがいを感じた。

成人式は娘たちのファッションショーであり、久しぶりに会った異性の品定めだ。小、中学校ではさほど目立つ存在でもなかった女の子が、見えるほどふくよかな美女に成長していたり、ハシ者を全部を機関銃で射殺してしまいたい腹立たしさを炎のように覚える——といった点では、この村の成人式もまさに全国水準にあつた。

ただ、この年、例年と違っていたのは、花ノ根に帰ってきた新成人たち六人を初瀬徳左右衛門が自宅に招き、犬井八郎に話をさせたことである。

八郎は大照れに照れながら、大学時代のエピソードをユーモラスに語ったあと、決して勉強だけが人生の目的でないし、知識と教養は異質なものであるから、学校に進まなかったからといって教養人

になる努力を忘れてはいけけないのではないだろうかと結んだ。

高校へ進学した者も、八郎を先輩として尊敬こそすれ悪感情を抱くことはなかった。

三学期にはいるときから始めた小、中学生相手の勉強会も評判は悪くなかった。

子供たちは勉強にはひどく熱心さを欠いてはいたが、とにかく勉強会に出ていくという理由なら大いばりで仕事を手伝わなくてすむためか、参加状況はすこぶるいい。親たちにしても、大学を

から盛り上がらなかった。つまり、これまでこの村に選挙戦らしい選挙戦が展開されたためがないのである。

ところが、今回は新しい候補者が立つことになった。近くの村の収入役が出馬を表明して、数度にわたる説得にもかかわらず、告示までその決心を変えなかったのである。

この選挙区の有権者数からして、二人とも当選などというおめでたい結果はとうてい望むべくもなかった。

無投票当選に近い予想を立てていた現職議員

卒業している八郎なら学校の先生と同じだし、とにかくシゲのところでは妙なバクチをおぼえてこられるよりはどれほどいいかわからないのだ。

榎の茂太郎の方もこの春先は忙しかった。県会議員の改選が始まり、近郷から出ている現職議員の運動員として畑ノ墾やカワラ木やその他の部落を駆けずりまわらなければならなかったからである。

これまでの県議選は、自分たちの生活と直接関係が遠かったから関心が薄かった。村議選はたいてい当落があらかじめ決定しているようなものだ

は、二倍という競争率に顔色を変えてしまった。シゲなども閑などところを見こまれて運動員に駆り出されることになったわけだ。

田の畔にヨモギの芽が萌え、麦の緑色が目立ちはじめ、やがては紅梅の蕾もふくらもうとする野面をシゲはメガホン片手に自転車で候補者名を連呼してまわったが、競争率二倍という選挙戦の熾烈さは候補者だけのものではしかなく、有権者の関心は依然として低かった。

秋祭りの人波整理や相撲の勧進元の用心棒なら

勝手のわかるシゲであったが、選挙の運動員は生まれて初めての経験であった。候補者名を連呼することはできてもこの候補者が現職に在る間にはどのような政治的活躍をしたのか、また無所属保守派であることはわかっている、どのような政治的信条を持っているのか、全く知らなかった。しかし、そういうことがわかっているなくても、運動員としての仕事はできると考えた点では、プロの選挙屋に近かった。

とはいっても、初心者のかなしき、自分の推しといったりする。声をかけてくれた人が必ずしも得票数に結びつくとは限らないのであるが、シゲはそのことばだけで何となくホツとする。当の候補者は、各村、各部落の主だったところを個別訪問して、票のとりまとめを頼んでいる。たとえば、花ノ根では三野庄平とか多山健吾が動いてくれるかどうかは得票数に大きく影響した。対立候補の元収入役もそのことは知っているから、村々の有力者回りはおさおさ怠らなかつた。三野庄平の家などは、告示から投票前日まで、

ている候補者が当選するかどうかについては甚だ心もとないのである。だから、勢いっぱい連呼の声をはりあげてはみるのだが、一向に効果はありそうに思えなかった。

カワラ木や畑ノ墾や花ノ根など、昔からシゲが自分の顔売っている村へ帰ってくると、彼はとたんに威勢がよくなった。野良に出ている住人が向こうから声をかけて

「どうでありますか、形勢は。現職の応援でありますから気は楽でありますようけれども」

何回となく選挙関係者が出入りした。そのつど、いくらかの運動資金が置いていかれるわけである。よく選挙からむ買収に関して一票いくらといった噂が流れるが、これは一票に対してそれだけ支払われたという計算ではなくて、ボスの手に何万円はあって、そのボスが何百票集めたかの割り算による。実際の有権者のふところに買収金がごろがりこむわけはなかった。ボスは、自分のふところの買収金を左手でまきぐりながら、右手であれこれ指図して票を動かす。

多く集めれば単価が下がるから候補者は喜ぶ。次の選挙のときには前回以上の金額がはいってくることもあり得ないことではないのである。

投票日の前々日、庄平の家へは花ノ根の主だったところが集まった。

庄平の意見によれば、花ノ根としては、やっぱり現職の県議を推すのがほんとうではないかというのだ。収入役をしていた新人候補は、自分の村のことについては現職議員より詳しいにちがいないが、県政は村政の拡大されたものではない。

だからである。

「いったい現職の議員は、これまでに何をしましたのでありますか。委員会の委員になりましたとも新聞に名前が出るほどの重大な質問をしたこともなければ、この地方の利益になるような事業を助成したこともありません。ほんとうに屁のような議員さんではありませんか。いてもいなくても同じような人なら、むしろ新しい議員を出して、この地方のために大いに働いてもらおうではありませんか」

初瀬徳左右衛門の隣りにすわっていた原吉之助

収入役から急に県議会に出ていっても決して有利な活躍ができるものではない。経験とか経歴の重さはそういうところに働いている。

庄平は弁じた。この県はもとより、この近郷が保守党一色にぬりつぶされているのは、こうした庄平のようなオピニオンリーダーとして働くボスたちの成果といわねばなるまい。

ところがこの夜は、庄平が予期していたほど簡単には花ノ根の意思はまとまらなかった。

初瀬徳左右衛門が庄平の意向に正面から反対はさっそくこの意見に賛成した。もちろん隣りにすわっていたからでなく、徳左右衛門と利害が一致しているからであった。

というのは、元収入役は庄平の家を訪れたついでに徳左右衛門の家へもまわり、応援を頼んで帰ったのである。もし、この新人が当選すれば、県会議員と直接つながりができ、花ノ根といわず、この地方にかなりな発言力が生まれてこよう。

徳左右衛門は新人候補に原吉之助を盟友の一人として紹介した。ふだんはとくに親しいという

間柄あいだがらでもなかったが、花ノ根はなのねにもちゃんとした
同志どうしがいるところを徳左衛門とくざえもんは示しめしたかったの
だ。吉之助きちのすけはその心意こころいきにひどく感激かんげきしてしまっ
た。

庄平しょうへいが新人しんじんを推おす考かんがえになっていたら、

徳左衛門とくざえもんに口出くちだしする余地よちはなかったのだが、

この野望やぼうに満みちた若い分限者ぶんげんものにとつて幸さいわいなこ

とに、庄平しょうへいはあらわにその保守性ほしゅせいを示しめしてきた。

(以上8月6日放送分)